

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部美学芸術学専修課程卒業
1983年4月	同大学院総合文化研究科比較文学比較文化専門課程修士課程入学
1985年3月	同修士課程修了
1985年4月	同博士課程進学
1989年3月	同博士課程単位取得退学
1989年4月	和洋女子大学文家政学部英文学科専任講師
1994年4月	和洋女子大学文家政学部英文学科助教授
1998年4月	和洋女子大学人文学部国際社会学科助教授
2003年4月	和洋女子大学人文学部国際社会学科教授
2008年4月	和洋女子大学人文学群日本文学・文化学類教授
2015年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

分析哲学、美学

b 研究課題

フィクションの存在論の研究から出発し、虚構文の論理構造の解明から論理学の「可能世界」概念の応用へ、そして「可能世界」概念そのものの論理の研究へと進んだ。その過程で、自然科学の「多世界」「多宇宙」の概念と「可能世界」との関係の考察を迫られ、それらの概念に立脚した「人間原理」を方法的基盤とした諸議論の中で哲学問題を再構成する仕事を進めた。現在は、芸術の現状に対して人間原理的（進化論的）な説明を与え、見かけの法則性を観測選択効果へ還元する論理を追求しつつ、多分野を横断する「諸理論のネットワーク」の中に芸術定義論を位置付けるプロジェクトを進めている。

c 概要と自己評価

哲学問題を人間原理の観点から考察し直す仕事については、心の哲学、ロボット科学、人文死生学といった分野の研究者と研究会を重ねる中で、着実に思索が進みつつある。人間原理の観測選択効果の論理構造を多くの領域に見出す作業とともに、長年の研究テーマであるフィクション論の人間原理的再構成を進めつつある。それでも、いくつかの下位カテゴリについては試論的な論考を発表できており、現在、サブカルチャーにおける例外的な実験芸術的試み（具体的には、アニメにおけるコンセプチュアルアートの実験）の事例を分析することから、人間原理的フィクション論の端緒を掴みつつあるところである。

新しい研究課題として、分析哲学的美学の中で中心問題となっている「芸術の定義」を、広くカテゴリ論の中で捉えなおす仕事に着手した。そのケーススタディとして、上記アニメの実験的事例の中から、人間原理を直接扱ったアニメ作品『涼宮ハルヒの憂鬱』の特異な演出を、カテゴリ変換のもとで再解釈する仕事を上梓した。その延長上において、「カテゴリ違和」という概念装置を提唱し、コンセプチュアルアート（非芸術から芸術への越境）、死生学（生から死への越境）、トランスジェンダリズム（性別の越境）を成立させる必要十分条件の構造的対応を探る試みを進めている。この「芸術の定義」と「ジェンダーの定義」の比較論は、「諸分野間の同型対応」の議論へと敷衍する予定であり、「芸術の定義」の諸理論を、「心身問題」「規範倫理学」の諸理論とそれぞれ対応させる試論を準備している。また、トランスジェンダリズムにおける「性自認」の諸解釈を、心身問題の諸理論と対応付けてその認知的基盤を探った英語論文を、現在執筆中である。

なお、クリティカルシンキングの啓蒙的発信に継続的に力を注いできたが、近年、ジェンダーをめぐるポリティカルコレクトネスにおいて新しい動きが活発化しており、その動向に関する所見をウェブメディアで平均月一度、発表しているが、そこには適宜、学術的成果を反映させるよう留意している。

d 主要業績

(1) 著書

- 単著、三浦俊彦、『論理パラドクス・心のワナ編——人はどう考えるかを考える77問』、二見書房、2019.3、218p.
- 単著、三浦俊彦、『パートランド・ラッセル 反核の論理学者——私は如何にして水爆を愛するのをやめたか』、学芸みらい社、2019.7、294p.

(2) 論文

三浦俊彦、「芸術的錯誤の諸相——ジェラルド・レヴィンソンの芸術定義論を手掛かりに」、『美学芸術学研究』、第36号、pp.137-170、2018.7

三浦俊彦、「コンセプチュアルアート視のための諸条件 —— 「エンドレスエイト」 のカテゴリ違和」、『哲学雑誌』、第132巻、第804・805号合冊、pp.79-101、2018.10

三浦俊彦、「思考実験と虚構世界、仮想世界、可能世界」、中村靖子編『非在の場を拓く』、春風社、pp.553-574、2019.2

三浦俊彦、「芸術の美的定義：その形式化からわかること——M. ピアズリーの枠組みで」、『美学芸術学研究』第37号、pp.95-121、2019.7

(3) 小論

三浦俊彦、遠藤侑、山本茉輝、「「エンドレスエイト」理解へのループ的メタレポート」、『こころの科学とエピステモロジー』創刊号 (Vol.1) 映像メディア時評：特集『涼宮ハルヒの憂鬱』、2019.3、pp.88-96

<https://sites.google.com/site/epistemologymindscience/issues/issue1>

(4) 学会発表

国際、Shoji Nagataki, Masayoshi Shibata, Takashi Hashimoto, Tatsuya Kashiwabata, Takeshi Konno, Hideki Ohira, Toshihiko Miura, and Shin'ichi Kubota “On the robot as a moral agent”2018.9.14 Palma de Mallorca, Cristina Manresa-Yee and Ramon Mas Sansó (Eds.) *Interacción 2018 Proceedings of the XLIX International Conference on Human Computer Interaction, Article No.: 24* (5 pages), ACM, New York, NY. doi:10.1145/3233824.3233832 <https://dl.acm.org/citation.cfm?id=3233832>

国内、橋本敬、金野武司、長滝祥司、大平英樹、入江諒、河上章太郎、佐藤拓磨、加藤樹里、柏端達也、三浦俊彦、久保田進一、柴田正良、「ロボットは道徳的な行為主体になり得るか、＜個性＞を持ち得るか」、2018.9.1、立命館大学 日本認知科学会第35回大会発表論文集、pp.958-960

国内、三浦俊彦、「人間原理芸術学の観測点としての『涼宮ハルヒの憂鬱』」、第69回美学学会全国大会（関西大学）、2018.10.7

国内、新山喜嗣・三浦俊彦・浦田悠・小島康次・やまだようこ・渡辺恒夫、「生死に関するカテゴリ違和の諸相」、シンポジウム「精神医学と現象学的心理学から死と他者の形而上学へ（第2報）：『人文死生学宣言』の誕生」、質的心理学会第15回大会、名桜大学、2018.11.24

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本科学哲学会『科学哲学』、編集委員、2016.4～

国内、美学会、委員、2016.10～、副会長、東部会代表、2019.10～

国内、科学基礎論学会、応用哲学会、東大比較文学会、会員、2016.4～